

『三つ目の椅子——第3席 レモン』

昔。ヨルファミリアが、まだ「ファミリア」と呼べるほど大きくなかった頃。そこにいたのは、二人だけだった。ヨル。そして、まふい。小さな拠点。小さな食卓。椅子は二脚。それで十分だと、まふいは思っていた。

ヨルさえいれば。それで。——その日までは。

雨だった。ヨルとまふいは任務帰りだった。

「ヨル」

「ん？」

「……血」



ヨルの腕に、細い傷が走っていた。本当に僅かな傷。今のヨルなら、気に留めるほどでもない。だが、その傷から滲んだ赤を、まふいは見てしまった。

「……………」

空気が変わる。まふいの瞳が、僅かに揺れた。呼吸が浅くなる。首元。鍵のついた黒いチョーカーが、微かに軋む。それは、まふいの普段の力を安定させる制御機構。鍵の管理と解除判断は、ヨルへ委ねられている。

そして、まふいにとって、ヨルの血を見ることは——内側に封じ込められた力が、強制的に目覚めようとする唯一の引き金だった。

「まふい」

ヨルが静かに呼ぶ。反応がない。

「まふい」

もう一度。今度は、少し強く。



「私を見て」

「……………」

まふいの視線が、血からヨルの顔へ移る。

「傷じゃなくて」

ヨルは言う。

「私を見て」

「……………ヨル」

「うん」

「生きてる？」

「見れば分かるでしょ」

「……………」

「私はここにいるよ」

数秒。張り詰めていた空気が、少しずつほどけていく。まふいの手が、チョーカーから離れた。



「……ごめん」

「謝らなくていいよ」

「でも」

「大丈夫」

ヨルが笑う。その時だった。

「それ」

知らない声。二人が振り返る。雨の向こう。一人の少女が立っていた。

「大丈夫じゃないでしょ」

ヨルが首を傾げる。

「誰？」

「それはこっちの台詞」

少女は近づく。まふいが即座に、ヨルの前へ出た。

「止まって」



「何？」

「それ以上近づかないで」

「怪我してるんでしょ？」

「ヨルには私がいる」

「……………」

少女はまふいを見る。そして、ヨルを見る。もう一度、まふいを見る。

「あなた」

「何」

「めんどくさいタイプ？」

「……………」

空気が凍った。

「ちょっ」

ヨルが止めるより早く、まふいの手が武器へ伸びる。



「待って待って待って！」

少女が両手を上げた。

「冗談！」

「面白くない」

「ごめんって！」

ヨルがぷっ。笑った。

「ヨル？」

「ご、ごめん」

「……………」

「だって、まふいが初対面の人にめんどくさいって……」

「笑わないで」

少女も笑い始める。

「あなた面白いね」



「ヨルに馴れ馴れしくしないで」

「また怒った」

それがヨルとレモンの、最初の出会いだった。

近くの廃屋で、雨宿りすることになった。少女はヨルの腕へ簡単な処置を施す。傷についた血を拭き取る。それを確認して、まふいの表情も、ようやく完全に落ち着いた。

「はい」

「ありがとう」

「どういたしまして」

まふいは、ずっと見ている。

「……………」

「……何？」

「近い」



「治療してるんだから仕方ないでしょ」

「もう終わった」

「はいはい」

少女が離れる。ヨルが尋ねた。

「名前は？」

「レモン」

「レモン？」

「変？」

「ううん」

ヨルが笑う。

「いい名前」

「でしょ？」

「自分で言うんだ」



「私は気に入ってるから」

レモン。爽やかで、明るくて。でも、酸っぱい。

「あなたは？」

「ヨル」

「ヨル」

レモンが繰り返す。

「そっちは？」

「まふい」

「よろしく」

「……………」

「よろしくは？」

「別に」

「やっぱりめんどくさ——」



「何？」

「何でもありません」

ヨルがまた笑った。不思議だった。まふいと二人でいる時とは、違う笑い方だった。それをまふいは、黙って見ていた。

事件が起きたのは、雨が止んだ直後だった。三人が廃屋を出た瞬間。周囲を複数の武装兵が囲む。

「……追手？」

ヨル。

「私の」

レモンが答えた。

「え？」

レモンの表情から、笑顔が消える。

「ごめん」



腰へ手を伸ばす。

「巻き込んだ」

そして、レモンエッジを抜いた。鮮烈な斬撃。一人目。浅い。
敵が笑う。

「その程度か！」

二撃目。別の場所。三撃目。また別。まふいが眉を寄せる。

「……何してるの」

敵を倒せていない。しかし、ヨルだけは気づいた。

「違う」

「ヨル？」

「あの子」

ヨルが笑う。

「全部見てる」

直後、レモンが踏み込む。



「そこ」

一点。先ほど傷を入れた三箇所。それらを結ぶように、レモンエッジが走る。——崩壊。敵の防御能力そのものが砕け散る。

「な——」

「遅い」

一閃。敵が倒れる。ヨルの目が、僅かに輝いた。

戦闘後。

「強いね」

ヨルが言った。

「まあね」

レモンは笑う。しかし、その直後。膝をついた。

「レモン？」



「平気」

「平気じゃない」

「これくらい——」

「それ」

ヨルが言う。

「さっき私が言ったやつ」

「……………」

レモンが黙った。ヨルがしゃがむ。

「人には大丈夫じゃないって言うのに」

「……………」

「自分は言うんだ」

「うるさいなあ」

初めて、レモンの笑顔が消えた。



「放っておいて」

ヨルは動かない。

「聞こえなかった？」

「聞こえた」

「じゃあ」

「嫌」

「……………」

レモンがヨルを見る。

「なんで？」

ヨルは答えた。

「なんとなく」

「何それ」

「理由いる？」



「いるでしょ普通」

「じゃあ……」

ヨルが考える。

「レモンが嫌いじゃないから」

「……………」

その言葉がレモンには、一番効いた。

レモンは、以前から一人で戦っていた。誰かと組んだこともある。仲間と呼んだこともある。けれど、最後には、離れていった。レモンの力は、敵の弱点を見つけることに長けていた。だが、それは戦闘だけではなかった。人の癖。

嘘。恐怖。隠している感情。見たくなくても、見えてしまう。だから、人間関係でも、

「気づきすぎた」。



嘘に気づく。裏切りに気づく。好意が消えていく瞬間にも気づく。いつしか。深く関わることをやめた。爽やかに笑う。適度に優しくする。でも、一定以上は近づかない。それが、レモンの生き方だった。酸味は自分を守るための、棘だった。

数日後。レモンは再びヨルと会った。偶然ではない。ヨルが探した。

「なんで来たの？」

「会いたかったから」

「……………」

レモンが困る。こんな人間は、初めてだった。

「私」

レモンが言う。



「人の嫌なところ、結構見えるよ」

「そうなんだ」

「嘘ついてるとか」

「うん」

「怖がってるとか」

「うん」

「だから」

レモンがヨルを見る。

「そのうち、あなたの嫌なところも見つける」

「あると思うよ」

即答だった。

「……否定しないの？」

「私だって完璧じゃないし」



「……………」

「見つけたら教えて」

ヨルは笑う。

「直せそうなら直すから」

レモンは、言葉を失った。その後ろ。まふいが立っている。

「私は？」

レモンが聞く。

「何？」

「あなたの嫌なところ見つけたら？」

「ヨルに害がないならどうでもいい」

「ブレないねえ……」

少し。笑った。本当の意味で。



決定的な事件は、その数日後。街を襲った異形。ヨルとまふいだけでは、市民を守りながら討伐することが難しい相手だった。

「右から来る！」

ヨルが叫ぶ。まふいが前へ出る。衝撃。異形の爪と、まふいの武器が激突する。しかし、別方向から伸びた尾が、ヨルへ迫った。

「ヨル！」

まふいが振り返る。僅かに遅い。鋭い先端が、ヨルの頬を掠める。赤い一滴。ほんの一滴だった。けれど、それが地面へ落ちるより先にまふいは見た。ヨルの血を。

「……………」

世界から、音が消えた。

「まふい？」



ヨルが気づく。まふいの身体が震えている。首元。黒いチョーカーが、激しく軋む。瞳の奥に、緋色が滲み始める。

「まふい！」

ヨルの声。だが、もう、解除の兆候は始まっている。

「ヨルの……」

まふいが呟く。

「血……」

殺気が膨れ上がる。レモンが息を呑んだ。

「何……これ……」

さっきまでのまふいではない。力そのものが、別物へ変わろうとしている。

「まふい！」

ヨルが叫ぶ。

「私を見て！」



「……………」

「血じゃない！」

ヨルは自分の頬を拭う。赤を消す。そして、まふいの正面へ立つ。

「私を見て！」

「ヨル……」

「私は生きてる」

「……………」

「まだ解除しなくていい」

「でも……」

「私を信じて」

まふいの瞳が揺れる。緋色が完全に染まり切る、その直前。

「……分かった」

殺気が、僅かに弱まった。完全な解除には至らなかった。だが、異形はまだいる。ヨルがレモンを見る。

「レモン！」

「分かってる！」

レモンは、震える足を前へ出す。怖い。目の前の異形も今のまふいも全部。怖い。それでも、逃げなかった。異形の外殻が開く。ほんの一瞬。見えた。

「そこ！」

黄色い閃光。レモンエッジ。異形の関節へ、傷が入る。

「こいつ、正面は駄目！」

一撃。二撃。三撃。異なる場所へ傷を入れる。

「ヨル！」

「うん！」



ヨルは説明されなくても理解した。レモンが作った傷。その全てへ、同時に攻撃を叩き込む。轟音。外殻が砕ける。

「まふい！」

ヨルが呼ぶ。まふいの目に残っていた緋色が、ゆっくり消える。

「……分かってる」

いつもの声。まふいが内部へ突入する。三人。初めてなのに、噛み合った。レモンが崩す。まふいが仕留める。ヨルが全体を支配する。そして、異形は倒れた。

戦いの後。レモンは笑っていた。

「いやー、危なかったね」

ヨルが見る。

「レモン」



「何？」

「怖かった？」

「……………」

笑顔が止まる。

「なんで？」

「手」

震えていた。レモンが隠す。

「別に」

「怖かったんだ」

「……………」

「私も怖かった」

レモンが顔を上げる。

「あなたが？」



「うん」

「強いのに？」

「強いのと怖くないのは別でしょ」

「……………」

一瞬。レモンは、まふいを見る。まふいは、ヨルのすぐそばにいる。

「……さっきの」

レモンが言う。まふいの表情が変わる。ヨルも、僅かに黙った。

「聞かない方がいい？」

レモンが続ける。ヨルは少し考えて。

「今は」

と言った。

「うん」



レモンはそれ以上、踏み込まなかった。人の秘密を見抜けることと無理やり暴くことは、違う。その違いをこの時、レモンは初めて選んだ。

「……ヨル」

「ん？」

「私」

少し迷う。

「ここにいていい？」

ヨルが首を傾げた。

「なんで聞くの？」

「え？」

「いてほしいけど」

あまりにも自然だった。

「……………」



「レモン？」

「ずるいなあ」

「何が？」

「そういうところ」

小さな拠点。食卓。椅子は、まだ二脚。レモンが立っている。

「座れないんだけど」

「あ」

ヨル。

「二つしかない」

「私はヨルの隣」

まふいが即答する。

「そこは取らないって」



「じゃあ」

ヨルが立ち上がる。物置へ行く。しばらくして、古い椅子を一脚、引きずってきた。

「重っ……」

「手伝おうか？」

「大丈夫」

「大丈夫じゃなさそうだけど」

「これは大丈夫」

三脚目。ヨルが、二人の隣へ置く。

「はい」

「……………」

レモンは、その椅子を見る。古い。傷だらけ。高価でもない。でも、なぜか。とても大切なものに見えた。

「レモン」



ヨルが言う。

「私たちと一緒に来る？」

「……………」

レモンは答えない。ヨルは続ける。

「それと」

少しだけ。照れたように。

「私の友達になってよ」

「……………」

レモンの目が見開かれる。仲間。戦力。協力者。そういう言葉なら、聞いたことがある。でも、友達。そんな単純な言葉を、こんなに真っ直ぐ言われたことはなかった。

「……親友になっちゃうかもよ？」

冗談めかして言った。ヨルは笑う。

「いいよ」



「後悔するかも」

「しない」

「私、結構うるさいよ」

「知ってる」

「嫌なところも見つける」

「教えて」

「……………」

負けた。レモンは笑った。今度は、自分を守るための笑顔ではなかった。

「分かった」

レモンは、三脚目の椅子へ座った。少しだけ軋む。

「……結構古いね、これ」

「物置にあった中では一番まともだったんだけど」

「これで？」



「文句あるなら返して」

「ないない」

レモンが笑う。

「結構気に入った」

「ならよかった」

「よろしく、ヨル」

「よろしく、レモン」

レモンは、まふいを見る。

「まふいも」

「……………」

沈黙。

「よろしく」

小さい声。レモンが笑う。

「聞こえなかった」

「二回言わない」

「はいはい」

そして、三人だけになった部屋を、改めて見渡した。決して広くはない。立派でもない。食卓も小さい。並んでいる椅子も、たった三脚。一脚目。ヨル。二脚目。まふい。そして、今日増えた三脚目に自分。

「……………」

レモンは、少しだけ不思議な気持ちになった。昨日までは、自分がここに座る未来なんて想像すらしていなかった。それなのに、今はもう、この三脚目が自分の居場所になり始めている。

「ねえ、ヨル」

「ん？」

「ここってさ」



レモンが、空いている部屋の向こうを見る。

「これから誰が入ったりするの？」

ヨルは少し考えた。

「分かんない」

「考えてないんだ」

「別に人数を増やしたくて始めたわけじゃないし」

「そっか」

まふいが静かに言う。

「私は三人でも多いと思ってる」

「まだ言ってる」

「ヨルと二人でよかった」

「はいはい」

レモンは笑った。そして、三脚しかない椅子を、もう一度見渡す。何となく、本当に、ただ何となく。



「でも……」

ぽつり。

「もっと賑やかになるのかな？」

ヨルがレモンを見る。

「ここ」

レモンは続ける。

「いつか椅子が増えてさ」

「私たち以外にも変な人がいっぱい来て」

「毎日うるさいくらい騒いでたりして」

「……………」

ヨルが想像する。まふいは、明らかに嫌そうな顔をした。

「静かな方がいい」

「まふいはそうだろうね」



「レモンもうるさい」

「加入初日に酷くない？」

ヨルが笑う。それから、空いている部屋を見る。

「でも」

「うん？」

「そうになったら」

ヨルは、少しだけ嬉しそうに笑った。

「楽しそうだね」

「でしょ？」

レモンも笑う。その時の三人は、まだ知らなかった。この小さな部屋に第四の椅子が増えることも第五。第六。そして、いつの日か、十番目の椅子まで並ぶことももちろん。そこに座る者たちが、どれほど騒がしく、



どれほど大切な存在になるのかもこの日。三人目が加わった。後の、ヨルファミリア第3席。レモン。しかし、彼女がその日手に入れた、一番大切な肩書きは第3席ではなかった。ヨルの友達。そしてそれは、長い時間をかけて。

親友という名前へ変わっていく。

現在。黑夜事変後。修復されたヨルファミリア本部。円卓会議室〈椅子の部屋〉。

「いんカス！ 返せって！」

「やだね！」

「二人とも走るなー！」

「あめちゃん近い」

「えー、いいじゃん」

「……まあいいけど」



「にゃんこ好きー！」

「私も好き」

「荷物置くゴマー！」

「そこ邪魔！」

「ゴマ！？」

「お姉様、これどこに置きます？」

騒がしい。本当に騒がしい。レモンは、少し離れた場所から、その光景を眺めていた。ふと視線が、円卓の周囲へ向かう。一脚。二脚。三脚。そして、十脚。全部埋まっている。

「……………」

ずっと昔。三脚目の椅子へ、初めて座った日のことを思い出す。——もっと賑やかになるのかな？何気なく口にした。深い意味なんてなかった。ただ、三人しかいない小さな部屋を見て、ほんの少し未来を想像しただけだった。



——いつか椅子が増えてさ。——私たち以外にも変な人がいっぱい来て。——毎日うるさいくらい騒いでたりして。

「…………ふふ」

思わず、笑いが漏れた。あの日の自分へ、今の光景を見せてやりたい。想像より。ずっと酷い。そして、想像より、ずっといい。

「何見てるの？」

隣から声。ヨル。

「ん？」

「なんか笑ってたから」

「いや」

レモンは、皆を見る。まふい。トムカス。ゆーカス。いんカス。あめちゃん。にゃんこ。ごま塩。なっち。そして、ヨル。

「覚えてる？」



「何を？」

「私がここに入った日」

「覚えてるよ」

「椅子三つしかなかったじゃん」

「うん」

「あの時、私言ったんだよ」

レモンが笑う。

「もっと賑やかになるのかなって」

ヨルが、少しだけ目を丸くする。

「ああ」

思い出したらしい。

「あれ」



ヨルも、目の前の光景を見る。ゆーカスといんカスが走っている。ごま塩が怒られている。あめちゃんがにゃんこへ抱きついている。なっちがその横で笑っている。

「……なったね」

「なったねえ」

レモンは、腕を組む。

「というか」

「うん？」

「想像よりだいぶうるさい」

「それは思う」

二人が笑った。

「でもさ」

レモンが言う。

「ヨル」



「ん？」

昔。三脚しかなかった場所。今。十脚すべてに、誰かがいる。

「私」

レモンは、ほんの少しだけ優しい声で言った。

「あの時より今の方が好きだよ」

ヨルがレモンを見る。

「ここ」

少しの沈黙。それから、ヨルが笑った。

「私も」

レモンも笑う。

「そっか」

少し離れたところ。まふいが、二人を見る。昔なら。ヨルに近い。そう思ったかもしれない。今は違う。

「まふい！」



レモンが呼ぶ。

「何？」

「こっち来なよ」

「……………」

まふいは、ヨルを見る。ヨルが笑って、手招きする。

「おいで」

「……うん」

まふいが歩いてくる。三人が並ぶ。原初の三人。三脚から始まった三人。その向こうには、七人がいる。もう。三人だけではない。だからこそ。三人だった時間も、消えない。レモンは思う。自分は、人の弱点を見ることができる。

昔はそれが嫌いだった。弱さを知れば、いつか嫌いになると思っていた。でも、違った。弱さを知って。それでも隣にいること。それが親友なのだとヨルが教えてくれた。あの日。何気なく想像した未来。



「もっと賑やかになるのかな？」

答えはもう、目の前にある。なった。とんでもなく賑やかになった。そして、いつの間にか。ここは、十人全員が帰ってくる場所になった。

「ヨル」

「ん？」

「これからよろしく」

「急に何？」

「別に」

レモンは笑う。鮮やかで、爽やかで、少しだけ、酸っぱい笑顔。

「親友だから言っただけ」

ヨルも笑った。

「うん」



「これからもよろしく、レモン」

十脚の椅子。その三番目。そこには今もあの日、初めて誰かの隣にいいことを選んだ少女が座っている。ヨルファミリア第3席。レモン。総帥の親友。仲間の弱さを見つけ、それを責めるのではなく、支えることを覚えた少女。

そして、ヨルファミリアがまだ二人だった時代を知る、最古参の一人。彼女の刃は、今も鋭い。爽やかな香りの奥に、敵だけを蝕む酸を秘めて。けれど、仲間へ向けるその手は昔よりずっと、優しくなった。

誰も気づいていなかった。黑夜事変によって傷ついた街。その遥か地下。光の届かない場所。——ドクン。何かが、一度だけ脈打った。長い眠りの終わりを、告げるように。だが、それはまだ、十人の誰も知らない物語。今はただ、

黑夜事変を生き延びた十人に、束の間の朝がある。そしてその中心で、三番目の椅子に座る少女が、親友と笑っている。それでいい。次の夜が、訪れるまでは。



